

多核種除去設備等処理水の取扱いに関する小委員会
風評被害払拭にかかる論点整理の方向性について

2018年2月

多核種除去設備等処理水の取扱いに関する小委員会 事務局

(1) これまでの議論の整理（主な意見）

①風評被害の現状及び発生メカニズム

- ・6年間のブランクでブランド価値が低下。消費者意識から流通構造の問題に。消費者が不安を覚えると流通業者が忖度し流通構造が変わる。結果、売れなくなり、新たな市場を開拓しないといけなくなる。
- ・市場占有率が高いと福島県産が選ばれる（きゅうり、あんぼ柿）が、他産地からの供給が多い時、流通段階の選択であえて福島県産を選ばない。
- ・福島県産の購入をためらう人は15%程度で固定化。
- ・風評被害の原因の一つは大々的な報道。マスコミの反応が消費者の判断に大きく影響する。

②多核種除去設備等処理水の処分

- ・トリチウムに対する理解が十分になされていない。
- ・「トリチウム水タスクフォース」で取りまとめた5つの処分方法のいずれを選択しても、管理された状態での処分であれば、安全性という点では問題ないというのがタスクフォースの一つの結論。
- ・一方、いずれの選択肢も風評被害が拡大する可能性がある中、処分の際には風評被害を最小化することが重要。
- ・タンクに貯蔵し続けること自体が新たな風評になっている面もあり、貯め続けることとのリスクの判断が難しい。
- ・例えば、速やかに持続可能な状態に移行させる必要がある一方で、現状（適切に管理されている中、貯め続ける状況）が最もリスクの低い状況とも感じる。

③対応策の検討

- ・現在の状況・取組をきちんと伝えることが重要。その際、受け手側のことを意識して伝える必要がある。
- ・海外、特に近郊国向けには誤解を解くようなメッセージの出し方を行うのも一案。
- ・また、トリチウムの理解を進めるためには過去のファクトを整理し公表することも一案。
- ・安心には、科学+ α が必要。誰から情報発信されるのかも重要。
- ・リスコミの3要素は、情報公開、対話、参加・協働。

(2) 今後の進め方

- ・一般的な風評対策は、「風評払拭・リスクコミュニケーション強化戦略（平成29年12月）」でとりまとめ。本委員会では、多核種除去設備等処理水の処分を見据えた風評対策の検討が必要。